

日向市立細島小学校との相互交流活動と授業改善 — 風景の重ね合わせという手法を手がかりに

竹内元ⁱ⁾・盛満弥生ⁱⁱ⁾・遠藤宏美ⁱⁱ⁾・野邊孝大ⁱ⁾・椋木香子ⁱ⁾

実践報告要旨

本実践報告は、大学院共通領域科目「教科外活動の構成と展開・評価と課題」の授業改善に関するものである。日向市立細島小学校6年生の修学旅行を起点に、小学校との相互交流活動を推進するとともに、大学院選択科目「小規模校のカリキュラムマネジメントと授業づくり」と連動させて、大学院生の学びに省察を促したものである。子どもたち・院生双方の「学び」がさらに生かされていくように、修学旅行の事前学習だけでなく、事後学習をオンラインでつなぐとともに、院生が小学校との相互交流活動という教育フィールド体験をふりかえることで、体験を学びに転換させるだけでなく、自らの学びをさらに分析することで、本質的な問題を定立していく。そうした学びをつなぐプロセスを検討することが、今後の課題である。

1. 大学院必修科目における日向市立細島小学校との相互交流活動

日向市立細島小学校6年生9名が、教職大学院の院生に地元の名物や観光について、プレゼンテーションを行った。郷土細島の紹介である。県内に変更された修学旅行の一環で、子どもたちが「細島の魅力を若い人たちに伝えたい」と発案して実現したものである。スライドを使って平兵衛酢やイワガキ、クルスの海、細島みなと祭りなどを紹介した。今回の受け入れは、大学院生にとっては、大学院共通領域科目「教科外活動の構成と展開・評価と課題」としての教育フィールド体験でもある。院生は、子どもたちの発表の様子を見ながら、子どもの実態やこれまでの子どもたちへの学習指導について理解する機会となった。子どもたちが退出した後には、グループワークを行い、今回の修学旅行における学習発表の意義や指導上の留意点などについても話し合った。

細島小学校6年生は、「食」「観光」「祭り」の3つの班に分かれて、「総合的な学習の時間」などを利用して、取材に行ったり、インターネット等で情報を集めたりしながら、プレゼンテーションのスライドや発表原稿を作成してきた。「教科外活動の構成と展開・評価と課題」においては、3名ずつの3つのグループに分かれて発表がなされた。発表は、クイズを入れたり、祭りのかけ声を実際にやったりするなど工夫が凝らされており、発表後の大学院生からの質問にもしっかりと受け答えしていた。さらに、事後の感想から、院生のメモを取る行為や話し方からも子どもたちが学んでいることがわかる。

一つ目のグループは、細島の代表的でおすすめする5つの食べ物について、写真付きのパワーポイント資料をもとに説明をした後、3択クイズを行った。さらに、大学院生との質疑応答が行われた。大学院生の質問は、「細島の食材を調理して出してくれるお店を教えてください」「平

i) 宮崎大学大学院教育学研究科

ii) 宮崎大学教育学部

兵衛酢カキ氷はどこで買うことができるか」など、子どもたちの説明を聞いて自分の中に浮かんできた疑問をそのまま質問したものである。

二つ目のグループは、細島の代表的でおすすめする観光スポットについて、写真付きで説明した。発表の仕方に工夫が見られたプレゼンテーションである。大学院生からは、「馬ヶ背まで歩く必要があると発表で言っていたが、どれくらい歩くのか」という質問や、「平兵衛酢ソフトクリームはいくらで買えるか」という質問がなされた。子どもたちからは「分かりません」という回答もあった。

三つ目のグループは、細島の伝統的なみなと祭りについて、祭りの概要と歴史を写真付きで説明した。かけ声の演示もなされた。その後、3択クイズがあった。大学院生からは、「2トンと言っていたが、何人でかつぐのか」「神輿の競争はどのくらいするのか」など質問がなされた。

三つの発表の後には、かんきつ類3枚の写真から平兵衛酢を選ぶ難問も子どもたちから出された。全体を通しての質疑応答では子どもたちが着ている羽織にインパクトがあったので、羽織に関する質疑が院生からなされたほか、「3つのテーマはどのように決めたのか」というように、これまでの子どもたちへの指導をイメージしようとする、「これから教師になる」といった大学院生の立場で質問がなされる場面もあった。なお、大学院生の質問は、すべてストレート院生が行ったものである。



【写真：発表の様子】



【写真：質問に回答する様子】



【写真：交流する様子】

修学旅行による訪問と大学院授業との連携は、小学校・教育学研究科双方の教育活動にとって有益なものとなっており、さらに、院生は、後日小学校で行われた授業研究会に参画したり、地域の太鼓のお披露目に誘われたり、交流活動が続けるものともなっている。

2. 相互交流活動のふりかえりと風景の重ね合わせ

大学院選択科目「小規模校のカリキュラムマネジメントと授業づくり」と連動させて、大学院生の学びを省察した。「小規模のカリキュラムマネジメントと授業づくり」では、前日の細島小学校のプレゼンテーションと質疑をふりかえりながら再現した後、あらためて、教育実践から学ぶ教員になる学生として、どのような質問をするのかを考えてもらった。さらに加えて、子どもたちに改善に向けてどのようにアドバイスするのか、教師の立場で質問も考えてもらった。

院生として検討し、院生から提示された質問は、以下のとおりである。

- ・ 3つのテーマにした意図は何ですか。テーマ設定のプロセスを教えてください。
- ・ なぜ、クーポンをつくらうと思ったのか。というのも、資料をインターネットからとってきただけでなく、自分たちで交渉し、クーポンを作成・配布していた。つまり、プレゼンそのものの工夫だけでなく、地域に働きかけてきたプロセスをプレゼンしたらよいのではないかと。

- ・この学習を通して気づいた細島の魅力は何ですか。というのも、学ぶことは変化することで、その成長も伝えてほしいと思った。
- ・分かったことだけではなく、調べたり学んだりする中で、新たに浮かんできた疑問をプレゼンしてはと思った。というのも、さらに、子どもたちに細島に出会ってほしいと思ったからである。

プレゼンテーションをどう改善するかという教員としてのアドバイスとして挙げられたのは、以下のとおりである。

- ・質問への対応の練習の仕方を工夫してはどうか。子ども同士で質問をし合うのはどうか。というのも、プレゼンは質疑応答までがセットであるから。
- ・動画で自己紹介してはどうか。相互評価だけでなく自己評価も行うとよい。国語の教科内容と連動して、プレゼンの仕方を見直してはどうか。
- ・発表原稿を5W1Hの視点で見直してはどうか。さらに、地域との関係性を深めてはどうか。
- ・平兵衛酢ソフトクリームは食べた方がいいよ。
- ・農家・漁師に直接聞いてきた方がいいよ。
- ・関連するような他の新しい食物を作ろうとしている人はいないの？つまり、新しいことにチャレンジしている人に目を向けないの？

さらに、聞き手の立場、院生の立場、教師の立場という3つの風景をふりかえりの中で重ね合わせた。こうしたプロセスを通して、院生が学んだことを示すと以下の通りである。

- ・子どもたちに対して、発表の内容を直接聞くような質問では、自分の学び、子どもの学びには、つながらないことに気づいた。子どもたちのプレゼンをどのように作っていくかのプロセスを把握し、それに見合った指導をしていくことも必要だと考える。誰の学びにつながるのかを考え、コメントやアドバイスを行うことが求められると考えた。
- ・プレゼン発表で終わるのではなく、次に生かすための課題や気付きをもたせることが大事であると気づいた。気付きをもたせるためには、地域外の人が聞くと、どう感じるのかを知る必要がある。また、改善すべき点を教員としてアドバイスする背景には、社会との関わりがあると考えた。社会に出るといことは、地域外の人とも関わることになる可能性が高いため、一市民としての視点をもった上で、アドバイスをする必要があるのではないかと考えた。そうすることで、子どもたちも地域の魅力と出会い直し、さらに社会の一員として自覚をもつことができるのではないかと考えた。
- ・一市民としての視点、大学院生としての視点、教員としての視点で見ることは、子どもと地域の将来を考えるきっかけになると思った。地域について発表するのが終わりなのではなく、地域について知った上で多面的・多角的な視点で捉え直すことが大切。というのも、小規模校の地域では、地域の問題に直面しているところが多いため、地域を知るにとどまってしまっただけでは、何も学びにつながらない。一市民、院生、教員としての視点で見ることで、新たな課題や気付きをもたせることができるかと考える。
- ・特に「地域との関係性をどう深めて行くのか」という疑問は、地域・子ども・教員の3つの視点をもって考えないと出ないのかなと思った。

- ・昨日までの視点は、一般市民として、院生として、というようにどれか一つの立場(視点)でしか見れていないことに気付いた。視点を変えることを意識して、今後の授業実践(フィールドワーク)を見たりまとめたりしたい。また、一人で学びや考えを終わらせるのではなく、仲間とそれぞれの視点で考えた時に、どのようなことが言えるのか、ということを経験すること、ということも大切にしたい。
- ・小規模校は、地域とのつながりが切っても切り離せない関係であるため、カリキュラム編成や学校の活動を行うにあたって、「学校」「地域」「子ども」のそれぞれの視点や立場を取り入れる必要があるということを経験した。というのも、視点や立場が変われば意見が変わるということを経験し、考えの深まりや豊かさにつながっていることに気づき、多くの立場が加わることの大切さを実感したからである。
- ・対象者に向けて発表するまでをゴールとして捉えるのではなく、発表後に見つけた新たな課題を次の課題として繰り返していくことが大切である。地域についてまとめ発表することは、子どもが地域と出会いなおし、地域の一員として行動できるきっかけ(機会)になると学んだ。
- ・3つの層で求められているものが異なる。3つの層の観点を指導(カリキュラム)の中で取り込むにあたって学校運営に地域住民・教育関係者・企業、3層それぞれを巻き込むことが重要だと思った。子どもたちの充実した学びにするために当事者意識を与えるようなカリキュラムを開発し、目的意識と相手意識が生まれるよう手立てを工夫する必要がある。そのためにも地域との関係性を深める。
- ・一般的な質問は、聞いていたお客さんとしての素朴な疑問だが、アドバイスは一緒に考えていて、子どもへの関わり方が変化している。子どもと地域の関わりを深める教員の手立てが必要と思った。というのも、教員が地域との関わりという視点をもっていなければ、本当の地域の課題にはたどりつかないからである。

「院生の学び」から、特に小規模校において、学校が地域のコミュニティの核になるだけでなく、防災・保育・交流などの様々な機能をもっているという現状、子どもがプレゼンテーションした「細島の魅力を若い人たちに伝えたい」という内容は、「地域の課題」につながっていること等を理解していることがうかがわれる。プレゼンテーションをどう指導するかではなく、子どもたちと地域の関係をどう構想するかという点で課題意識が醸成されたと思われる。

3. 考察と今後の課題

細島小学校の子どもたちの「細島の魅力を伝える」プレゼンテーションを聞いたり、その内容について質問したりすることは、公立学校の子どもの実態、子どもたちの問題意識を院生が知るだけでなく、子どもたちへの指導の在り方などを考えるよい機会となっている。今回は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、子どもの発表・質疑応答という内容のみであったが、より深く発表内容について掘り下げたり、アドバイスしたりするために、少人数のグループでの意見交換等をするなどの場を設定することも大切となる。さらに、必要に応じて事後にオンラインで宮崎大学と細島小学校をつなぎ、子どもたちが「総合的な学習の時間」の学びを発表したり、院生から質問したりする場を設けると、子どもたち・院生双方の「学び」がさらに生かされていくと考える。

細島小学校の子どもたちのプレゼンテーションに対する当日の質問を振り返ったり、「聞き

手」「院生」「教員」の3つの視点で質問を具体的に考え直したりすることにより、多面的に子どもたちのプレゼンテーションの内容及び話すスキルについてのよさや課題等を把握することができたのではないかと考える。ただ、自分の知りたいことを質問するだけでなく、教員としての質問を考えることを通して、どのような質問であれば、子ども自らその意義や課題等について気付くのか、次の学習につながるのか等を理解することができ、教師としての指導力向上につながっていくと考える。さらに、授業の質を高めるためには、教師だけではなく、「市民」「保護者」「地域」「企業」など、様々な視点や立場で教材や授業内容等をとらえたり、考えたりすることが必要であること、調べて発表して終わりではなく、次の学びにつながるような単元及び授業構成等が重要であることを理解したのではないだろうか。

ところで、総合的な学習の時間では、地域体験型の学習が盛んであり、地域の産業や自然を取り上げながら、当該地域のすばらしさを探す授業が定番となっている。学校では、こうした地域のよさを学び、子どもたちが地域の誇りをもつことを期待している。しかし、地域体験型の学習で重視すべきは、地域のよさや美しさを子どもに語るのではなく、地域の直面する困難こそどのように解決すべきかを、子どもを地域の一員として迎え入れながら一緒に悩むことではないかとも指摘されている。地域の課題そのものを子どもたちと共に学び合うことの重要性が指摘されるのは、もはや教育の問題としてではなく、地域の維持と再生の問題となっているからである¹⁾。ここでは、教師だけでなく、子ども自身も地域の価値を捉えなおす必要性が指摘されているが、多くの地域体験型の学習は目的と手段の関係が交錯している。院生が小学校との相互交流活動という教育フィールド体験をふりかえることで、体験を学びに転換させるだけでなく、自らの学びをさらに分析することで、本質的な問題を定立していく。そうした学びをつなぐプロセスを検討することが、教員養成カリキュラムとしての今後の課題である。

4. 注

- 1) 竹内元「小規模校から学校を考える」日本教育方法学会編『教育方法 49』図書文化社、2020年、84-96頁、参照。